

畳点とその作品効果

角 田 健 一 (大 塚)

Kenichi (Taiyo) Tsunoda

「畳点」とは、簡単に言えば「繰り返し点」のようなニュアンス

をもって使用する単語である。「畳点」の語は比較的よく耳にする言葉ではあるが、必ずしもこの名称は一般的とは言えず、しかもその用途も単純とは言えない。例えば現在出版されている書道辞典の類にこの後は見出し語として殆ど存在しておらず、飯島春敬『書道辞典』では「複合体」の項目中に以下のように示している。

漢字における複合体としては、秦の泰山・瑯邪台刻石に「大
夫」の二文字を「夫」の文字の下に畳点を用い「夫≡」として
「大夫」と読ませる例がある。

そのほか、河野隆『書道テキスト第10巻 篆刻』に

同じ文字の繰り返しや、上下連続する文字間の共通部位を処理
する際に、表現の複雑さを緩和する為、短二横画(≡)を添え
て、同文、同部位の繰り返しを表す方法。重複する字を重字
(ちょうじ)、畳字(じょうじ)と呼び、短い二横画を畳点と呼

ぶ。

とあり、複数存在する用語の一つに過ぎない。中国では「畳用符」
「重文号」「重文符合」とこれもまた呼び名が定まる様子はない。

古典に目を移せば、古くは甲骨文よりこの畳点【図1】は見られ
る。この考釈にも諸説あるようだが、少なくとも郭沫若は『殷契粹
編』において「乃又有重文」としており、「≡」を「重文」という
語で示している。

最もこの畳点を多用するのが、西周金文である。文末に常套句と
して「子子孫孫」とするところを「子=孫=」の如く重複する文字
を畳点によって処理する形【図2】をとる。そしてこれらは一字中
に場所を取らぬよう、「≡」を文字に内在する形で収めることが多
いのも特徴である。ほか、《石鼓文》【図3】も繰り返し文字を
「≡」として畳点を用い、西周金文と同様に畳点は文字内に含まれ
る形で書写されていることもよく知られている。

以降、疊点の類は《楚帛書》【図4】のように合文の形（これは前掲の「大夫」の用い方と同じである）や、《石鼓文》のように単に繰り返し（某某↓某ニ）で使用する例も金石文・簡牘問わず散見されるが、漢碑では疊点そのものがほぼ見られなくなる。例えば《礼器碑》【図5】の如くである。一方で《石門頌》【図6】のように「」の形で疊点を用いる特殊な例もあるが、「命」字の最終画を伸ばす箇所が見られるなど簡牘文字と特徴を同じくする極めて稀な漢碑である。

記念碑的な西周金文に多用されたことから、金石文だからというわけではなく、この頃肉筆文字で多用される疊点が省略の類であるという意識の強まりによって、記念碑に「省略体」を用いることを嫌ったことも一つの要因かもしれないが、詳しくはわからない。

《宣示表》【図7】や東晋の王羲之【図8】にも疊点は見られる。この時代に入って、疊点にやや右下がりの傾向が強まり、王羲之に至っては書体上の問題もあってか二つの点が続いたり、離れたりする。少し時代が下った北魏楷書の《司馬頌妻孟敬訓墓誌》【図9】にも疊点が見られるが、二つの点が続して「」のように書かれ、本文より行意が現れている。書体変遷の過程で行草書を経過したことも要因かと思われる。

以上、時代を追って大雑把に疊点について触れた。殊に殷時代か

ら戦国時代にかけての疊点は他にも指摘すべき点が多くあるが、紙面の関係もあるので稿を改めたい。

拙作は西周金文《裘衛盃》を作品にしたものである。比較的自由に疊点を用いる西周期の表現を取り入れ、作品効果としての疊点のあり方を狙ったが、結果はこのようなものになった。

◆題名 裘衛盃一節

◆釈文 定＝伯＝隹＝伯＝單＝伯＝乃令參有司＝徒微

◆サイズ 一五八×三八センチ

【図1】



【図2】





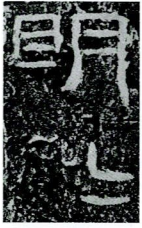
【图3】



【图4】



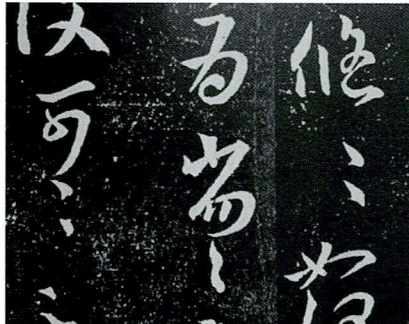
【图5】



【图6】



【图7】



【图8】



【图9】



定 = 伯 = 獠 = 伯 = 單 = 伯 = 乃令參有司 = 徒微

158 × 38cm